

英語の「歯とことわざ」

大庭 健

目次

プロローグ

For there was never yet philosopher that could endure the toothache patiently.

(歯の痛みは哲学者でも我慢できない)

Pull not out your teeth but with a leaden instrument.

(歯を抜く時は鉛の鉗子を使え)

Trust not a horse's heel, nor a dog's tooth.

(馬はいつ後ろ足で蹴るか分からないし、犬はいつ噛みつくか知れない)

To have an aching tooth at one.

(歯の痛みのように激しく当たれ)

Revenge of a hundred years hath still its sucking teeth.

(百年来の報復は孫の代まで続く)

The wolf may loss his teeth, but never his nature.

(オオカミは牙を失っても野生の動物であることに変わりはない)

To cast into my teeth.

(私を非難するとは)

With tooth and nail.

(必死になって)

To sow dragon's teeth.

(ドラゴンの歯をまく)

Pull out one tooth and pull out more.

(歯は1本だけでなくもっと抜け)

To take the bear by the tooth.

(難局に立ち向かう)

Poison more deadly than a mad dog's tooth.

(毒舌は狂犬病の毒牙より怖い)

An eye for an eye, and a tooth for a tooth.

(目には目を、歯には歯を)

With (By) the skin of one's teeth.

(間一髪で)

Never bite, unless you make your teeth meet.

(上下の歯が咬み合わない限り、嚙んではいけない)

Weeping and gnashing of teeth.

(泣きわめき、歯ぎしりする)

To take the bit in the teeth.

(頑として引きさがらない)

She has no teeth to bite.

(彼女には食ってかかる歯がない)

Your colt's tooth is not cast yet.

(貴方はまだ若い)

Old as my tongue and a little older than my teeth.

(見掛けと中身は一致しない)

Nor shall not, while I have a stump.

(そんな事はない。私の歯は磨り減り切り株同然)

In spite of one's teeth.

(如何なる反対も物ともせず)

Any tooth, good barber.

(どの歯もみな腕のいい職人)

To have a sweet tooth.

(甘い物に目がない)

Tied by the teeth.

(食で結ばれている)

Wite your teeth if your tail be small.

(如何なる結果も人のせいにはしてはいけない)

The fathers have eaten a sour grape, and the children's teeth are set on the edge.

(父親が酸っぱいブドウを食べると、食べない子まで酸っぱくなり歯が浮く)

Bit them wash their faces , and keep their teeth clean.

(やつらの顔を洗わせ、歯をきれいにさせておけ)

Sans teeth, sans eyes, sans taste, sans everything.

(歯もなく、目もなく、味もなければ、何ひとつない)

Search something with a fine-tooth comb.

(隈なく探す)

Every tooth in a man's head is more valuable than a diamond.

(どの歯もみなダイヤモンドより価値がある)

The tooth of time and razure of oblivion.

(齢という時と忘却というヤスリ)

Music helps not the toothache.

(音楽では歯の痛みを鎮めることは出来ない)

Long in the tooth.

(歳を取りすぎている)

If you cannot bite, never show your teeth.

(噛みつく勇気がなければ、歯を剥き出してはいけない)

Bone in her teeth.

(歯で骨を銜える)

Tinsel-teeth.

(金ピカの歯)

Dressed to the teeth.

(見事に着飾る)

Drop one's teeth.

(びっくりする)

Get one's teeth into something.

(意を決して事に臨む)

Clean as a hound's tooth.

(やましい事はない)

Armed to the tooth.

(隙間なく武装する)

To lie in one's teeth.

(はなはだしい嘘をつく)

As scarce as hen's teeth.

(あり得ないこと)

Sink one's teeth into something.

(何かにかぶりつく)

In the teeth of the wind.

(風に向かった真っ向から逆らう)

Fly in the teeth of somethings(someone).

(何(誰)かに向かって真っ向から反対する)

Grit one's teeth.

(歯を食いしばる)

Through one's teeth.

(涙みのある声で)

Cut one's teeth

(物心がつく)

エピソード

プロローグ

ことわざは「古くから人々に言いならわされたことば」と、『広辞苑』では定義している。ことわざに身体の解剖学的部位が慣用句として取り上げられることは決して珍しいことではない。特に目、口、舌、耳、歯などが対象になりやすい。身体に関する用語の中でも、口、舌、歯が、言葉とかかわりがあることは感覚的にも理解できる。舌と歯はある時は同義語として用いられ、さらにある時は両者が対比されることがあるのは面白い。

歯の持つ本来の機能は物を噛み、食いちぎり、噛み砕くことにある。時には歯が外敵に対する攻撃や防御のための武器として使われることがある。ヒトの歯が凶器として用いられることは滅多にないが、動物は飼料の摂取と同じくらい、武器としての歯の持つ役割は大きい。

歯が武器として使われることがあることから、歯は敵意、破壊、滅亡などを意味する慣用句として用いられる。武器という比喩の延長線上には戦闘員や武装した兵隊を示唆する心理が働くのは当然のことかも知れない。

歯は食との関わりがあることから、食を表す言葉の比喩としても用いられる。歯は特に味覚や嗜好を意味する言葉としても力を発揮する。歯は食だけではなく、感情や表情を表わす身体言語として、聖書やシェイクスピアの作品に散見されるのは興味深い。

歯は解剖学的には口の中で白く光る小さな器官。歯は体の中で最も固い組織。歯が骨より硬いことを意識することは滅多にない。

ことわざにある歯の多くは比喩として用いられることが多い。歯とことわざが日常生活に根付いた文化の一端を担っているからであろう。

英語のことわざに込められた歯の持つ意義と役割についての考察が、日本人にとって歯の文化について考えるきっかけになることを期待したい。

英語のことわざを収集するに際して、底本として ‘*The Oxford Dictionary of English Proverbs, Third Edition 1970.*’ をご紹介頂いた、今は亡き外山 滋比古 先生に心より感謝の意を表します。

For there was never yet philosopher that could endure the toothache patiently.

(歯の痛みは哲学者でも我慢できない)

シェイクスピアの戯曲『から騒ぎ』の第五幕第一場で、リオナードがアントーニオと交わす有名な台詞。

ヨーロッパには ‘*There is no pain like the gout and toothache.*’ (痛風と歯痛ほど痛いものはない) と言うことわざがある。

歯の痛みは哲学者でも堪えられないらしい。シェイクスピアも歯痛に悩まされていたの

かも知れない。歯痛に比べると痛風の痛みは取るに足らないと思ったのであろう。

歯が痛むと愉快でない。思考力は鈍り、頭は散漫になる。痛い歯が気になり、つい舌の先で触れたりする。

‘The tongue ever turns to the aching tooth.’ という古い英語のことわざがある。「舌は痛い歯に触れたがる」と直訳したのでは面白味がない。「とにかく人間（舌）は触れてはいけない真実（痛い歯）に触れたがる」と哲学的に解釈すると、さらに面白味が増すかも知れない。

わが国にも「むしくひ歯に物さはる」（『世話盡』）という言葉がある。弱みに付け込まれ苦しむことの譬えとして用いられる。

古今東西、痛みは人類最大の悩みである。なかでも、歯の痛みは苦悩を越えた苦痛であると言ってよいであろう。

Pull not out your teeth but with a leaden instrument .

（ 歯を抜く時は鉛の鉗子を使え ）

古い英語のことわざ。

自分の大切な歯を抜く時は、鉛製の鉗子を使えと言っている。昔は歯を抜くのは至難の業であったことから、困難に直面したら最善を尽くせという譬え。

今は鋼鉄製の鉗子を使って歯を抜くが、昔は鉛で出来た鉗子で抜歯していた。鉛製の抜歯鉗子は紀元前 300 年頃、ギリシャの医師 Erasistratus が考案している。

鉛製の鉗子は材質が軟らかく歯をしっかり掴むことが出来る反面、抜歯中に鉗子に変形するという難点があった。それでも当時は最高の抜歯器具であった。歯周病でグラグラした歯であれば難なく抜けたはずである。

昔、ヨーロッパでは鉛細工が盛んだった。歯の詰め物にも鉛を使っている。鉛は細工しやすいので歯の治療に用いたのであろう。今では信じられない材質の充填物である。

鉛が重宝な金属であるのは今も昔も変わりはない。ことばとしての鉛は分が悪く、わが国には「鉛は刀と為すべからざる」という言い伝えがある。鉛は軟らかくて刀に出来ないことから、愚か者は使い道がないという譬えに用いられる。

英語でも ‘leaden instrument’ と言えば、切れ味の悪さや、鈍感さを意味する。昔の ‘leaden instrument’ は最高の器具であったのであろうが、今は切れ味の悪い道具と見做されても仕方がない。

Trust not horse's heel , nor a dog's tooth.

（ 馬はいつ後ろ足で蹴るか分からないし、犬はいつ噛みつか分からない ）

古い英語のことわざ。

過信は禁物ということ。油断大敵と言ってもよい。

シェイクスピアの戯曲『リア王』の第三幕第六場に、Fool（阿呆を装った道化師）の台詞として、'Hen's mad that trusts in the tameness of a wolf, a horse's health, a boy's love, or a whore's oath.' という文句がある。

飼いならされたオオカミ、馬の後ろ足、少年の恋、売春婦の約束など信じる者は狂人だと言っている。

何事も過信すると、あとで痛い目に合うということ。

‘*The Oxford Dictionary of English Proverbs, Third edition, 1970*’では、'health' は'heels'の誤りではないかと記載されている。

いずれにしても、予期せぬことへの警鐘であることに違いはない。

同じような意味の英語に、'Three things are not to be trusted — a cow's horns, a dog's tooth, and a horse's hoot.'（信用で出来ないものに、牛の角、犬の歯、馬の蹄の三つがある）と言うのがある。

動物は静かだからと言って安心してると突然襲いかかると言っている。

人間も同じである。怖いのは寡黙な人。静かだからと言って甘く見ると突然、胸を突くような発言をすることがある。

To have an aching tooth at one.

（ 歯の痛みのように激しく当たれ ）

人を非難したり、怒りをあらわにする時に用いる表現。歯の痛みは博動性で、痛烈であることに習っている。

歯の痛みは不吉、不快な感情を現わす時の言葉として用いることが多い。

わが国にも「人を呪えば歯の痛むごと呪え」という俗信がある。人を恨む時は歯の痛みのように激しく呪えと言っている。「痛むごと」は「痛むように」の方言。

人を叱責する時、英語で 'To show one's teeth.' や 'To cast into one's teeth.' と言う。人を非難したり、人に強迫的な態度を取る時も、歯が引き合いに出されるのは興味深い。

「歯を出す」と言えば、感情をむき出しにした怒りの表情である。その歯が痛むように激しく当たれと言うのだから、怒り心頭に発する思いなのであろう。

Revenge of a hundred years has still its sucking teeth.

（ 100 年来の報復は孫の世代まで続く ）

古い英語のことわざ。

‘sucking’ は物を吸うという意味があり、‘sucking teeth’ は母乳を吸う歯、すなわち乳歯であると解釈できる。

乳歯は若い世代の比喻であり、先祖代々続く報復の精神は孫の代まで受け継がれていると解される。

乳歯は現実的には永久歯の生える前の歯。永久歯を歴史的に先代に譬えると、乳歯は現在を生きる孫のような世代に相当する。

ヒトの歯は乳歯が脱落すると永久歯に生え代わるのが普通である。乳歯が脱落せずにつまでも残ると、次に生える永久歯は欠損している場合が多い。乳歯だからと言って理屈なしに抜くと、あとで痛い目にあう。

永久歯が生えて来なければ、乳歯は親の思いを継承できない。乳歯が永久歯に代わり踏ん張る姿はどこか親のいないけなげな子を思わせる。

The wolf may loss his teeth , but never his nature.

(オオカミは牙を失っても野生の動物であることに変わりはない)

古い英語に見られることわざ。

動物に限らず、人間も外見は変わっても本性はいつまでも残るものだという譬え。

『旧約聖書』に‘The leopard does not change his spots.’ という句がある。これも本性は決して変わるものではないと言っている。

「^{ひと}人の性は悪、^{せい}其の善なる^{あく}者は^そ偽なり^{ぜん}」は『荀子』の「性悪」にある一節。

人間の本性は生まれつき悪いもの。善があるとすれば、それは後で身に付けた人為的なものであると言う。

わが国にも「三つ子の魂百まで」や、「雀百まで踊り忘れず」ということわざがある。

本性ではないが、幼い時に身に付けた習性はいつまでも残ることを教えている。

To cast into my teeth.

(私を非難するとは)

シェイクスピアの作品『ジュリアス・シーザ』の第四幕第三場で、キャシアスがブルータスに向かって吐いた台詞。

‘He cast it in my teeth.’ (彼は私に向かってズバリ言っのけた) は同じ用法。‘my teeth’ は「私」の比喻。彼は私に面と向かってきつい言葉を投げつけたのである。

歯の中でも前歯は門歯と言う。特に上の前歯は大きくて、あたかも家の門構えのように

堂々としている。門は「物事が必ず通らなければならない重要な所」と『漢語林』（大修館書店）にある。隙間のない門歯は何物をも通さない。‘be armed to the teeth’（くまなく武装する）と言う英語があるように、隙間のない歯並びは堅固な要塞を想像させる。

「歯の間に隙のある者は運が悪い」「歯の間の透ける者は嘘をつく」「歯並びの好い者は運がよい」「歯並びのよい者は正直」など、歯並びについての俗信がわが国には多い。中には寝言でも言えない言葉がある。

歯並びが悪いと心理的にもよくない。中でも門歯は人の目を引きやすく目立つ。門歯は出ている、引っ込んでいても分が悪い。分が悪いとつい手で口を覆いたくなる。話も出来ない。最悪の場合は口だけでなく、心まで閉ざしてしまう。たかが歯並びなどと侮ってはいけない。

「オオカミは近寄った。が、その虚栄心のためにかれは歯を四本うしなうことになった。ウマはかれに一発くらわして、逃げてった」（ラ・フォンテーヌ『寓話』キツネとオオカミとウマ、岩波文庫、今野一雄訳）。

オオカミにとっての歯は強い意志であり誇りでもあった。その歯を失った。

歯は想像以上に自尊心の強い器官である。

With tooth and nail.

（必死になって）

古い英語に見られることわざ。

噛んだり引っ掻いたりするのは動物に限っての所作ではない。人間も心の中では歯をむき出し爪を立てる。

‘Go at it tooth and nail.’ や ‘Fight tooth and nail.’ も同じ意。

動物の歯と爪は獲物を捕らえるだけでなく、わが身を守るための武器としての役割も果たす。人間は動物のように戦に歯と爪を使うことはないが、動物の闘争心を見て心のよりどころにするかも知れない。

To sow dragon's teeth.

（ドラゴンの歯を蒔く）

ギリシャ神話に出て来るドラゴンの歯。

フェニキアの王子カドモスがカドメイア（後のテーベ）を創建するとき、泉を守るドラゴンを退治し、その歯を蒔いた。歯はたちまち武装した兵士になり地中から現れたと言う。

紛争を阻止するための行為がもとより災難を招くと言う譬えである。

カドモスは戦乱を鎮圧したあと、テーベを創建するとともに、アルファベットをギリシャに伝えたとされている。カドモスは多くの兵士を始末したが、生き残りの者はのちにテーベの貴族の祖となる。

ドラゴンは翼と爪があり、口から火と煙を吐く伝説上の怪獣。ギリシャ神話のドラゴンの歯は悪魔の歯と言われるが、現代英語では俗語であるが、先の尖ったコンクリート製の対戦車用障害物を意味する。

ギリシャ神話に端を発したドラゴンの歯は、第二次世界大戦で戦車の阻止に使われている。

Pull out one tooth and pull out more.

(歯は一本だけでなくもっと抜け)

徹底的に骨抜きにすることの譬え。

歯の比喩には強い意志と鋭い手腕がある。歯は力の象徴であり、懲罰の対象にもなる。

‘The city council pulled the teeth of the mayor.’ (市審議会が市長の権限を剥奪した) はその用例。‘pulled the teeth’ は ‘pulled out teeth’ と同じ意。

体の中で最も強靱な歯を失うと、権力の喪失だけでなく、精神的にも好ましくない。肉体的には体力の衰えを暗示する。高齢者は死を意識するかも知れない。

精神分析学者のシグムント・フロイトは、歯は若さの象徴であり、健康な歯は性的にも健全であると言っている。歯の脱落する夢は精力の減退と性の中性化を意味すると言う。

ロールシャッハテストでインクの染みが歯に見えると、若くて攻撃的であり、しかも精神的であると解されている。

かつてイスラム社会ではハレム保護のため、男性の去勢と抜歯を同時に行っている。あながち偶然の行為とは思われない。

わが国には「歯の抜けた夢は不吉」と言う俗信がある。歯は歳の譬えであり、歯を失うことは命を落とすことにつながると考えたのであろう。

To take the bear by the tooth.

(難局に立ち向かう)

古い英語に見られることわざ。

クマの歯をつかむと言うのだから、極めて危険な行為である。勇気を持って行動することの譬えになっても不思議ではない。

‘Take the bull by the horns.’ (雄牛の角をつかめ) も同じ様なことを言っている。

中国には「虎穴に入らずんば、虎子を得ず」と言うことわざがある。

大きな目的を果たすには、危険を覚悟で臨まなければならないと言う譬え。

わが国にも「鬼の牙にも当たってみろ」と言う俚諺がある。物は試しだから、勇気を持って行動しろと言っている。

成果を得るための心構えに国民性の違いなどない。

Poison more deadly than a mad dog's tooth.

(毒舌は狂犬病の毒牙よりも怖い)

シェイクスピアの作品『間違いの喜劇』の第五幕第一場で、尼僧院長がエイドリアーナと交わした台詞。

エイドリアーナは嫉妬深い女であるが、夫を愛する気丈な女でもある。

先の句にある 'poison' (毒) は喧噪で嫉妬深い女の譬え。その毒性は狂犬病の犬に噛まれるより危険であると言っている。口角泡を飛ばす女はそれくらい怖い存在だった。

ヒトの歯の中で最も尖っている歯は犬歯。犬の歯はどの歯も鋭く、牙と言うにふさわしい。犬の歯はヒトの歯とは異なり、上下の切歯と犬歯は交互に咬んでいる。前歯の並び方は物を噛むためと言うよりも、食いちぎるための並び方をしていると言った方が正しいかも知れない。臼歯に至っては咬んでも上下の歯は接触すらしない。それでも噛めるから不思議である。

犬の歯は上下左右に切歯 3 本、犬歯 1 本、前臼歯 4 本、後臼歯 3 本がそれぞれあり、歯の総数は 22 本。犬の歯の数はヒトの歯の 32 本より少ないが、咬む力は歯の数に勝ると言ってもよいであろう。

犬の歯は鋭くて危険なためかことわざになりやすい。「犬同士は咬まない」はイタリアにあることわざ。

「犬」はあまりよい意味の譬えにならない。一癖も二癖もある人間を表わすことがある。わが国にも「犬」を使った譬えがあるが、曰く因縁のある人間を意味することが多い。

「犬が死んで狂犬病がやむ」はコロンビアにあることわざ。

悪いことは元から断たなければ収まらないということ。

An eye for an eye , and a tooth for a tooth.

(目には目を、歯には歯を)

『新約聖書』の「マタイ福音書・第 5 章」に見られる有名な句。

『旧約聖書』や『ハムラビ法典』に由来する言葉である。わが国では「目にて目を償い、

歯にて歯を償う」や、「目には目、歯には歯」と言われている。

「目には目を、歯には歯を」と言った報復の仕方を「同害報復法」と言うらしい。同じ行為で仕返しをすると言うのである。自分が害を受けても、それ以上の報復はしないと言う精神であろう。相手の身分により手加減を加えないのも公平でよい。

体の中でも、目と歯が損害賠償の対象になっているのが興味深い。『旧約聖書』では目と歯に続き、さらに「手には手を」、「足には足を」とある。

被害が肉体に及んだ場合、加害者は肉体的にも精神的にも完全に補うことは難しい。出来るとすれば、同じ被害者になるしかない。

『新約聖書』では、イエスはその弟子たちに、『目には目を、歯には歯を』といわれていることは、あなたたちの聞いているところである。しかし、私はあなたたちに言う。悪人には手向かうな。もし、誰かがあなたの右の頬を打てば、左の頬を向けてやりなさい」と言っている。対人関係の問題は愛と忍耐により対処しろと言うのである。

『新約聖書』にあるイエスの慈悲深い言葉とまではいかないが、『書経』の「大禹謨」に「刑は刑無きを期す」とある。

刑罰を科す真の目的は世の中から刑罰をなくすことにあると言う。「歯には歯を、目には目を」には、報復や償いを超越した深い慈愛の精神があるのであろう。

With (By) the skin of one's teeth.

(間一髪で)

かろうじて難を逃れたときの形容に用いる言葉。出典は『旧約聖書』。

‘I am escaped with the skin of my teeth.’ (私は間一髪で難を逃れた) はその用例。幸運だった

‘I got to the air port late and missed the plane by the skin of my teeth.’ は不運な例。私は飛行場に遅れて着いたので、飛行機はすでに飛び立っていた。

幸運であろうが、不運であろうが、原因の差はわずか。結果は雲泥の差がある。

‘skin’ と言えば、‘No skin off someone's teeth.’ という俗語がある。「問題ではない」と言う意。

‘It's no skin off my teeth if she wants to act that way.’ はその用例。彼女がそうしたいのであれば、そうすればよいと言っている。

皮膚が比喩的に用いられるときは、物理的には薄いものを、時間的には短いものを、そして空間的には近いものを表す。歯には目に見えない皮膚のように薄い膜がついているのであろう。

わが国のことわざに、「歯に衣着せぬ」と言うのがある。言葉の譬えである歯に衣を着せないのだから言葉は丸裸になる。遠慮会釈もない裸の言葉は人の心を傷つけやすい。

歯に衣を纏えば窮屈で言いたいことも自由に言えない。むき出しの言葉は露骨で反感を買う。言葉遣いは難しい。

Never bite, unless you make your teeth meet.

(上下の歯が咬み合わない限り、咬んではいけない)

古い英語のことわざ。

何事も感情に走ってはいけない。冷静に考えた末に行動しろと言う譬え。

怒りを表す言葉に「歯を咬む」がある。咬むには上の歯と下の歯が合致しなければならない。歯と歯が合えば、咬合力という力が生じる。その咬合力をむやみに発揮してはいけない。熟慮の末、行動に移せと戒めている。

歯と歯が合えば、「咬む」あるいは「嚙む」と言った物理的な力が生じる。言葉で「歯と歯を合わせる」と言えば、心をつににした固い約束事を意味する。

「八人男が歯を合た事を反古にはされめへではねへか」(『滑稽本』八笑人一三)。

男同士の約束は破る訳にはいかない。「反古」は「反故」の古語。約束を一方的に破ることの意。

「歯と歯をつげえた中だ物を」(『洒落本』穴可至子)も固い約束を交わした仲だからと言っている。

‘Don’t be angry unless you have a real reason to be angry.’ (正当な理由がない限り、怒ってはいけない) は英語にある言葉。

「忿^{いか}りには難を思う」(怒りが込み上げてきたときは、あとで起こる煩わしさを思い、怒りを外に表すことはしない) は『論語』の「季氏」に見られる一節。

共に怒りの対処法と言ってよいであろう。

洋の東西を問わず、感情表現に差はない。怒りを理性で押さえろと言っても無理な話。口に言うは易く、行うは難しである。

Weeping and gnashing of teeth.

(泣きわめき、歯ぎしりする)

『新約聖書』の「マタイによる福音書 (第8章)」に三度出て来ることば。「ルカによる福音書」にも一箇所見られる。

泣きわめき歯ぎしりするの、天国で開かれた宴会に招かれなかった信仰心の薄いユダヤ人。

「歯ぎしり」は怒りや悔しさを表す身体的感情表現。「歯ぎしめ」「歯嚙み」「歯切り」な

どとも言う。歯の表情に加え、目を吊り上げ、拳を握れば怒り心頭に発した様相になる。

「首おさへても取るべしと、歯ぎしめして立けれ共」(『好色五人女』一三)、「大地を叩き歯嚙をなし、拳を握り嘆きしは」(『曾根崎心中』)、「白眼みつけて歯切りして、骨髓通してうらみし有様」(『好色一代女』一三)など、すべて歯を用いた怒りと悔しさの表現である。

「歯ぎしり」という言葉は聖書だけでなく、江戸期の文芸作品にも多く見られる。井原西鶴や近松門左衛門の作品に多くあるのが目を引く。

歯ぎしりは江戸庶民の苦悩を象徴しているのかもしれない。

To take the bit in the teeth.

(頑として引き下らない)

馬が銜をくわえて暴れ、人の手に負えないさまを言う。

銜は馬がくわえる轡の口の部分。くわえると言っても、実際には上下の歯でしっかり噛むのである。

「イヤ申し、あのやうな口の強いお馬は、小冢の一軒や二軒は引き倒すでござろう」(『狂言』富士松)。

手綱を引くのが容易でない悍馬のことを言っている。悍馬は頑固なことの譬え。口うるさい人を言う。

銜をくわえ、必死に抵抗する姿は馬に限って見られるのではない。人間も歯を食いしばり、頑固一徹になることがある。

歯の力は馬鹿にできない。噛む力が弱ると思考力まで低下すると言われている。笑顔を失った高齢者が歯の治療により、心まで明るくなったという嘘のような本当の話がある。

歯の力は歯があるだけでは生まれぬ。顎が丈夫でなければならない。歯がぐらつき、顎の力が弱いと、固いものは噛めない。

強い歯と逞しい顎は馬だけに必要なものではない。人間も頑固に意思を押し通す時には顎に力を入れて歯を強く噛みしめる。弱音を吐くと馬に馬鹿にされる。

She has no teeth to bite.

(彼女には食ってかかる歯がない)

シェイクスピアの作品『ベローナの二紳士』の第三幕第一場に見られる句。

ランスがスピードに返した台詞である。ランスは紳士の一人、プロテュースの召使。スピードはもう一人の紳士、ヴァレンティンの小姓。

先の句の全文は、'Well , the best is , she hath no teeth to bite.' とある。彼女には食って

掛かる歯がなくて好都合だと言っている。

スピードが言った台詞は「彼女は歯がない」「彼女は怒りっぽい」である。歯があると危険極まりない。

洋の東西を問わず、昔の人は歯が悪かった。歯の治療技術も貧しくて、いったん歯が駄目になると抜くしかない。歯の病気を予防するために知恵を働かせたのは当然のこととなる。

昔、ドイツでは朝一番の尿で口をゆすぐと歯に良いと言われた。特に男の子の尿が効き目があったと言う。

アッシリア（メソポタミア北部地方の古い名称）にある古い医学書に、口臭の予防として塩で歯を磨くとよいと記載されていると言う。わが国でも昔は塩を用いて歯を磨いていた。

昔のヨーロッパでは歯が抜けた場合、人の歯を用いて移植している。移植しても性病に罹患した者の歯である場合が多く、成功するのは極めて難しかった。歯の欠損部を義歯で補うようになるのはその後のことである。

歯の移植技術や義歯の精度が向上した現代であっても、歯や歯茎が悪くて噛むことに悩みを持つものは少なくない。

比喩とは言え、歯は咬みつくためにあるのではない。物事をじっくり噛みしめるためにあることを忘れてはなるまい。

Your colt's tooth is not cast yet.

（貴方はまだ若い）

シェイクスピアの戯曲『ヘンリー八世』の第一幕第三場で、宮内大臣がサンズ卿に言う台詞。若くて元気がよいことの譬え。

‘colt’は若い牡牛。その生きのよい牛の歯がまだ抜けずに残っているとやっている。‘colt's tooth’は若さの比喩であり、若くて快活な人を言う。

「年齢」と言う漢字は歯と年は切ってもきれない関係にあることを表している。動物の中でも馬の歯と年齢はよく一致することから、諸外国には馬の歯と年齢を用いたことわざが多い。

「もらった馬の歯を見るな」「ただ乗りの馬なら歯なんかどうでもよい」「馬は歯で、女は母親で」などがその例である。

馬を買うとき、目利きは歯を見て年齢を推し量り、馬の良し悪しを決めた。若い馬の歯は長くて丈夫だが、年老いた馬の歯は磨り減っていて短い。

人様から品物をもらったとき、頂き物の値踏みをするを「馬の歯を見る」と言う。品物を馬の歯に譬えて品定めするのである。

年は取りたくない、歯も失いたくない、などと無理なことを考えて凡人は一喜一憂する。誰しも一生現役でありたいと願うのが普通であろう。一番大切なのは肉体の若さではなく、

心の若さである。

Old as my tongue and a little older than my teeth.

(見掛けと中身は一致しない)

古い英語に見られることわざ。

生物学的な肉体の若さは年相応であるが、実年齢は暦歴による年齢より少し老けて見えると言っている。

舌は肉体の比喩であり、歯は年齢の譬え。舌と歯が縁語であるのが利いている。

歯は生まれた時にはまだ生えていない。月日が経つと歯は萌出する。最初に生える歯は乳歯。乳歯が抜け落ちると、その後に永久歯が生え揃う。ヒトの歯が一生に二度も生えるのは特異的と言ってよい。歯は成長過程で乳歯と永久歯に分けられるが、臓器や器官は成長に伴い解剖学的名称が変わることはない。

舌と歯はことわざでよく対比される。

‘The tongue walks where the teeth speed not.’ も昔の英語にあることわざ。歯による制止がなければ、舌は何を言い出すか分からないと言っている。

「舌は^{わざわい}禍の^ね根」はわが国のことわざ。歯で舌を口の中に封じ込めなければ、舌は暴走してして何を言い出すか分からない。

「歯はときには舌を噛むことがある」は中国のことわざ。

歯と舌は常に密接な関係にあることから、親しい間柄であっても時にはいがみ合うことがあると言っている。

「舌は歯よりも傷つける」はスワヒリにあることわざ。

言葉は腕力よりも人を傷つけやすいと言うことの譬え。腕力による肉体の傷よりも、言葉による心の傷のほうが痛手は大きいと言うこと。

歯と舌を比べたことわざは世界のどの国においても見られる。わが国にないのは不思議である。固い歯と柔らかい舌を対比するのは論外と言うのか、それとも力と言葉は比べ物にならないと考えるのであろうか。

現実的には歯が舌を噛むことはあっても、舌が歯を傷つけることはない。

Nor shall not, while I have a stump.

(そんなことはない。私の歯は磨り減り切り株同然)

シェイクスピアの作品『ヘンリー八世』の第一幕第三場で、サンズ卿が宮内大臣に切り返した台詞。

宮内大臣の台詞は ‘Your colt’s tooth is not cast yet.’ (貴方の仔馬のような若い歯は抜けずに残っている) である。実際にはサンズ卿の歯は加齢により磨り減っていたのであろう。

年齢が話題になると、すぐに引き合いに出されるのが馬の歯。歯の磨り減り具合が年齢に比例するからである。

年取った馬の歯は磨り減っていて短い。歯冠は木の切り株を思わせる。若い馬の歯は原形を保っているのが長い。若い牡馬の歯が肉体の若さの象徴になるのは当然のことであろう。

馬は同じ草食動物の牛に比べ、歯の種類と数においては釣り合いが取れている。前歯 3 本、犬歯 1 本、臼歯 3 本、大臼歯 3 本がそれぞれ上下左右にある。歯の総数は 40 本。どの歯も上下でよく噛み合っているのが特徴。

馬の犬歯は雄しかないのが興味深い。それも雌を獲得するためにあると言うから、何とも痛ましい。

「馬は歯で、女は母親で」はコロンビアにあることわざ。馬の良し悪しは歯で、娘の性格は母親を見て判断せよと言っている。

わが国には「馬と女^{おんな}はてんで目^めきき」と言う古い言葉がある。馬は必ずしも歯ではなく、女と同じように好みで選べと言うから寛大である

In spite of one’s teeth.

(如何なる反対も物ともせず)

歯は攻撃や防御のための武器として使われることがあることから、「反抗」や「反逆」を意味する言葉として用いられる。

‘show one’s teeth’は反抗を、‘in the teeth of’は反逆を意味する。

シェイクスピアの作品『ウインザーの陽気な女房たち』の第五幕五場に、‘In despite of the teeth of all rhyme and reason.’ というホールスクッフの台詞がある。直訳すれば、「韻や理屈と言う反対があるにもかかわらず」となるが、意識により、「韻や理屈を無視して」と解されるであろう。

歯と言えば、シェイクスピアの作品では歯はいろいろな比喩として用いられている。

‘There will come a Christian by, will be worth a Jewess’ eye.’ は『ヴェニスの商人』の第二幕第五場で、ラーンスロットがシャイロックとジェシカを前にしてつぶやく台詞。シャイロックはユダヤ人の金貸しでキリスト教徒嫌い。ジェシカはその娘。キリスト教徒のロレンゾと言う恋人がいる。ラーンスロットはシャイロックの召使。

先の短い台詞の中には歯が価値あるものの譬えとして隠されている。‘Jewess’ eye’ も大切な物の譬え。ジェシカの目と重ねて言っているのであろう。

昔、イングランドのジョン王時代、ブリストルに住むユダヤ人に一万マルクの租税を課かした。税金を納めない者には納めるまで歯を一日一本抜くことにした。ユダヤ人は七本目の

歯を抜かれたところで降参したと言う。

ジョン王はこのことを聞いて、「目を抜くよりも、歯を抜く方が実入りがいい」と言ったとか。

『ベニスの商人』では、ジェシカは父親の反対を押し切って駆け落ちする。

Any tooth , good barber.

(どの歯もみな腕のいい職人)

古い英語に見られることわざ。

理髪師は職人の象徴。歯には前歯は前歯、奥歯は奥歯の役割がある。専門的なことは専門家にはかなわないと言う譬え。餅は餅屋と解してもよいであろう。

‘good barber’ は技術の優れた理髪師を意味するものではない。腕のいい職人を言う。

十七、八世紀頃のヨーロッパでは、理髪師が外科医や歯科医の仕事の一部を担っていた。理髪店の看板が赤（動脈）、白（包帯）、青（静脈）の縞模様になっているのはその表れである。理髪師は修道院では健康管理者としての仕事もあり多忙であった。手の平に刺さったとげや、足の裏にできた魚の目なども取り除いている。

歯は咀嚼や構音になくてはならない器官である。歯の形はそれぞれの機能にふさわしく出来ている。前歯は物を咬み切るのに都合のよい形をしている。歯の切端は刃物のように鋭い。上下の歯を咬み合わせると、鉗子や鋏のような形になるのは見逃せない。

前歯は発音に際しても大切な歯である。前歯がなければ歯茎音は出ない。歯がすいていても正しく発音することは出来ない。

奥歯は臼のような形をしているので食物をすり潰すのに都合がよい。咬合面は広くて表面には多数の溝がある。合理的な構造を呈していると言ってよい。奥歯がなければ軟口蓋音を発するのに苦労する。

‘good barber’ と言えば犬歯を挙げない訳にはいかない。犬歯は「糸切り歯」という称があるように、糸を巧みに噛みきることの出来る器用な歯である。歯の中でも職人中の職人と言ってよいであろう。

To have a sweet tooth.

(甘いものに目がない)

昔の英語に見られることわざ。

‘To have a sweet mouth.’ とも言う。いずれも甘い物が好きな人の譬え。俗に言う甘党である。

甘い物が歯に良くないのは、古今東西変わりはない。

古い英語に ‘Sweet things are bad for the teeth.’ というのがある。ここでは単に「甘い物は歯に悪い」と言っているのではない。短い言葉の中に深い意味が秘められている。

‘sweet things’ は甘い言葉の譬えであり、‘teeth’ は強い意志の象徴。権力も賄賂には敵わないのである。

‘I am glad that my Adonis hath sweet tooth in his head.’ も古い英語に見られる一節。

‘hath sweet tooth’ は ‘has sweet tooth’ に同じ。愛に溺れて甘い罠に掛かりやすいことを言う。

‘Adonis’ はギリシャ神話に出て来る美少年。ヴィーナスに愛された少年である。

先の一節の ‘My Adonis’ は愛しい人の譬え。意中の人が恋に落ちそうなので喜んでい。甘い食べ物は歯をむしばむが、甘い言葉は人の心をうつろにする。

Tied by the tooth.

(食で結ばれている)

昔の英語に見られることわざ。

食は人を束縛することを言い表している。

歯はいろいろな譬えに用いられるが、その一つに「食」がある。食はヒトが生きるために必要な栄養素の源。それゆえに食に甘んじて溺れたりする。

‘They were tied to the rich man by the teeth.’ は古い英語にある一節。

人は貧しいが故に富める人に従う。見返りに食が伴うからである。

「胃は鉤へかけないもの、歯は棚には置かないもの」「歯がそろっている間に十分な仕事をせよ」は共にロシアにあることわざ。

働かなければ食えない。さらには、若いうちに精一杯働いておけと言っている。食うために働くのは当然の義務であろう。

「勘当かぶるに歯は欠けず」はわが国にある言葉。勘当を受けているのに厚かましくも恥知らずな生き方をしていると居候をなぶっている。「食いつぶすやつに限って歯をみがき」という古川柳もある。

「衣食足りて礼節を知る」と言うが、食客は少しくらいひもじい思いをした方が礼節を知ることが出来るかもしれない。

Wite your teeth if your tail be small.

(如何なる結果も人のせいにはいけない)

古い英語にあることわざ。

‘wite’ はスコットランド語。英語の ‘blame’ に相当する。

‘teeth’ は比喩的に堅い意志を伴った行為を表す。‘tail’ はその行為により生じた結果である。‘tail be small’ はしっぽが小さくなることであり、さしずめ結果は先細りになったと解してよいであろう。要するに自らの意志のもとに行った行為の結果には、自ら責任を取らなければならないと言っている。

「口の中に歯がある限り、『私は関係ない』とは言えぬ」はスイスのことわざ。

人間、長く生きていくと、自分の意志とは関係なく災難が降りかかることがあると言っている。世の中には責任のとれない結果もあるということであろう。

歯は固いことから、固く約束することを「歯と歯」と言う。『歌舞伎』の「勝相撲浮名花触」に、「男と男が歯と歯の切れ文」と言うくだりがある。

歯は上と下が噛み合った時が絶対的な出会い。その時、最大限の力が発揮される。その絶対的な出会いから生まれる約束事も、一瞬にしてかたくなな絶交に変わることがあるからこわい。

「口は ^{わざわい} 禍 ^{もと} の元」と言うことわざがある。

歯を口の同義語とすると、配慮のない言葉（歯）がやはり不幸な結果を招くことがあるということ。

‘Loose tongue lose word. ‘ や ‘I put my foot in my mouth.’は、さしずめ口は禍の元の英語版と言ってよいであろう。

言葉は力。不用意に用いた言葉は人の心を傷つけることがあるので、言葉遣いは慎重でなければならない。言葉は責任の表れと言ってもよいかもしれえない。

The fathers have eaten a sour grape, and the children' teeth are set on the edge.

（父親が酸っぱいブドウを食べると、食べない子まで酸っぱくなり歯が浮く）

歯は条件反射で浮くことがある。ここでは身体の生理的な反応を言っているのではない。親の犯した罪が子に災いすることを比喩的に説いているのである。出典は『旧約聖書』。わが国には「親の因果が子に報う」と言う言葉がある。

同じく『旧約聖書』に、‘**The sins of the fathers are visited upon the children.**’と言う一節がある。親の犯した過ちが無邪気な子に罰として現れると言う。

親の悪事と言えるかどうかは別にして、快樂がもとで罹患した花柳病の歯が胎児の歯胚に感染し、歯の形成不全を起こすことがある。生まれ落ちた我が子が成長し、永久歯が生えた時に親の因果が明かされる。罪のない子に親の付けが回って来たのでは子がかawaiiそうである。

聖人君子には無縁であろうが、「因果応報」と言う仏教の教えがある。原因と結果の関係

を道徳的に説いたものである。原因となる善悪が幸不幸という結果を招くと言う。

倫理上の因果関係は抽象的で分かり難い。病気による身体の変化は因果をもって説明出来る。因果応報と言うものではない。病気をすべて親の過ちにしたのは、親子の絆はいくらあっても足りない。

Bit them wash their faces, and keep their teeth clean.

(奴らの顔を洗わせ、歯をきれいにさせておけ)

シェイクスピアの戯曲『コリオレイナス』の第二幕第三場で、コリオレイナスがメニーニウスに言う台詞。

メニーニウスは世故に長けた老貴族。「奴ら」とは、護民官の権力を認める貴族。

先の句を文字通り読めば、「身ぎれいにさせておけ」となる。穿って言えば、「いつ仇討ちを食らってもいいようにさせておけ」となるであろう。

古代ヨーロッパの人間にとっては入浴や歯磨きは非日常的な行為であり、稀な習慣であったと言ってよい。面倒くさくて日頃めったにしないことをしろと言うのだから、これほど厄介なことはない。

イスラム教の聖典『コーラン』の中に、「お祈りをする前に歯をきれいにしておけば、ご利益が七十五倍になる」と書かれていると言う。「口を清潔にするのは神をたたえることである」とも啓示されているようである。

わが国の大相撲にも興味ある所作がある。対戦する両力士は取り組む前にそれぞれ東西の場所で腰をかがめて、そこで水を口にして清める。あとは白い紙で濡れた口元を拭う。最後の所作として力士は土俵に塩をまき、それから仕切りに入る。

口に水を含む相撲の所作はどこかみそぎの作法に似ている。神社にお参りする時、両手を洗ったあと口も漱がなければならない。歯と口を清く保つのは、裏を返せば口は不浄であることを暗に示している。

今は歯を清潔にするのは日常の習慣になっている。歯は毎日磨くから、いつ不意打ちを受けても恐れることはない。戦ではなく歯の検診を言っているのである。

Sans teeth, sans eyes, sans taste, sans everything.

(歯もなく、目もなく、味もなければ、何一つない)

シェイクスピアの作品『お気に召すまま』の第二幕第七場でジェイクイズが言う台詞。

人生を七幕の芝居に譬えた場合の最終章を意味する。複雑な人生劇の最後は赤子への後戻りのようなもので何の目的もない。すべては無に帰するものだと言っている。

歯が欠け、目はかすみ、何の嗜好もなければ、誰のための人生かと懐疑的になるのは当然のことであろう。長く守ってきた健康な体があちこち衰えていくのは実に寂しい。感覚器の機能の低下は何よりもつらい。

「七十餘歳をすぎて物見るには目がねを掛け^{むかふは}向齒^{たこ}まばらにして^{ふうみ}蛸^{たこ}の風味をわすれ、かうの物さえ細^{こまか}におろさせ、世に楽しみなき朝夕^{てうせき}をおくり、ましてや色の道ふんどしかきながら女中^{じゅうせん}同前の男、心のうき立つ程大口^{ほく}いうより外はなし」(『好色一代女』一 一)。

西鶴もシェイクスピアに負けてはいない。年老いた男の嘆きを十分に吐いている。

身体^{からだ}の老化はとにかく興味本位にとらえられやすいが動じることはない。歯が欠けてゆくさまを冷静に見つめた立派な文学作品もある。

「煙管^{きせる}の中が塞^{ふさが}ったので、竹を麦わらのように細かく削って差し入れておいたところ、中につまったまま一向に抜けない。(略) 欠け残った奥歯でしっかりくわえて引いてみた。すると、竹は抜けずに、歯がめりめりと抜け落ちた。(略) 人の手を借りるのをわずらわしく思って歯を使ったのである。(略) その折々に寿命のひたすら縮まりゆくことを、いま片割れの歯を見るにつけても思い知らされた」(『我春集』小林一茶)。

Search something with a fine-tooth comb.

(限なく探す)

‘a fine-tooth comb’ は目の細かい櫛。‘I searched this place with a fine-tooth comb and didn’t find my ring.’ はその用例。

辺りを限なく探したが指輪は見つからなかった。

櫛の歯は密なもの^①と粗いものがある。‘a fine-tooth comb’ は歯が密に並んだ櫛。粗い櫛の歯は歯と歯の間の隙間が広いので髪を容易に通す。密なものは簡単には通さない。比喩的に粗い櫛の歯は物を見落とすが、密なものは見落とさないと解される。

櫛の歯も人の歯と同じようにいろいろな譬えに用いられる。

「国々の早馬、鎌倉へ打ち重て、急を告ぐる事櫛の歯を引が如し」は『太平記』に見られる一節。

「櫛の歯を引くが如し」は、人の往来や物事が絶え間なく続くさまを言ったもの。各地から来た早馬がひっきりなしに鎌倉入りする様子を表している。

「櫛の歯を引くが如し」は「櫛の歯を挽くが如し」の意であり、櫛の歯を次からつぎへと引くようにして削って作ることを言う。

「櫛の歯^はさえ掛^かからずして、人の口の歯^{ひと}に掛かる」と言うことわざもある。

櫛の歯のように隙間なく並んだものにも引つかからない些細なことが、人の歯に掛かるとすぐに噂に上ると言う譬え。「口の歯」は「口の端」であり、人の噂。

‘a fine-tooth comb’ は英語の句であるので、欧米の櫛を想定しての比喩になる。わが

国で櫛と言え、三日月形のつげの櫛を想像する。果たしてどちらの櫛の歯が人の口の歯に掛かりやすいのであろうか。

Every tooth in a man's head is more valuable than a diamond.

(どの歯もみなダイヤモンドより価値がある)

セルバンテスの『ドン・キホーテ』 第三巻第一編にある一節。

ドン・キホーテが従士サンチョ・パレサに言う台詞。この台詞の前に「奥歯のない口は臼のない粉ひき場のようなもの」(岩波文庫・永田寛定訳)とある。

『ドン・キホーテ』には、その他にも「歯は真珠」「歯を食いしばり」「歯と歯を打ち合わせ」など、歯を用いた表現が少なからずある。セルバンテスは自分の歯に強い関心を持っていたのであろう。

歯は「^は歯」あるいは「^{しが}歯牙」と言う。

「歯」は前歯と奥歯を区別することなく言う称。「歯牙」は歯の種類を意識した総称。歯牙の「^は歯」は臼歯を意味し、「^し牙」は前歯のような鋭い歯を言う。虎の歯は^{きば}牙と言っても、牛の歯を^し牙と言わないのは興味深い。

先の句の‘every tooth’は前歯と奥歯を含めての呼称である。

『^{いかやう}如何様なる者ぞ』と問はせければ、生まれ落ちたる^{けしき}気色は、世の常の二三歳ばかりにて、^{かみ}髪は^{かた}肩の^{かく}隠るる程に^{ほど}生ひて、^{おく}奥歯も^{むか}向歯も殊に大に、^{こと}一口^{ひとくち}生ひてぞ^お生まれたる」(『義経記』一三)は弁慶出生時の様相。

奥歯と前歯は殊さら大きく、口いっぱい生え揃っていたと言う。「向歯」は上顎の門歯、すなわち切歯の称。

子が生まれ落ちたとき、すべての歯が生え揃っていることはない。弁慶は特別な子であったのであろう。歯は体格と同じように大きかったと言うから、これもまた別格である。

歯はそれぞれの役割がある。どの歯も大切である。歯が一本でも欠けると、噛むことも、しゃべることもままならない。

The tooth of time and razure of oblivion.

(齢という時と忘却というヤスリ)

シェイクスピアの作品『尺には尺を』の第五幕第一場でのウィーン侯爵、ヴィンセンシオの台詞。

‘the tooth of time’の‘tooth’は年齢の比喩であり、齢と言う時と解される。ヤスリは物を削り落とすことから、忘却や風化の譬えとしてよいであろう。

‘razure of oblivion ‘の’ razure ‘は ’ razor ‘ の綴りの誤りであり古語ではない。

「きみは歯をみんなだめにしちゃうだろうよ。わたしが恐れるのは『時』の歯だけさ」はラ・フォンテーヌの『寓話』「ヘビとヤスリ」(岩波文庫・今野一雄訳)にある一節。

時計屋に入り込んだヘビがヤスリを齧り始めた時、ヤスリがヘビに言う台詞。

自分はヘビの歯など恐れるに足りないが、あたかも時を食っているような、あなたの歯が怖いと言った。歯は刻々と磨り減ってしまい、無駄な時間だけが過ぎる。

寓話の中ではヘビは「能無し」、ヤスリは「立派な作品」の譬えとして用いられている。

「時という歯」(the tooth of time) という表現がシェイクスピアとラ・フォンテーヌの作品で重なるのが興味深い。

『尺には尺を』は1604年に創作されている。『寓話』の巻の五にある「ヘビとヤスリ」は1668年の作品。シェイクスピア没後、52年目に当たる。

ラ・フォンテーヌの「わたしが恐れるのは『時』の歯だけさ」という描写は、シェイクスピアの影響を受けていると想像される。

時と言う歯は時を食い、忘却と言うカミソリ(ヤスリ)はすべてを消し去ってしまう。

Music helps not the toothache.

(音楽では歯の痛みを鎮めることは出来ない)

古い英語に‘Music hath charms.’(音楽には魔力がある)と言うのがある。音楽療法と言う病気の治療法があるくらいだから、音楽に魔力があっても不思議ではない。魔力があるとされる音楽でさえ歯の痛みを押さえることは出来ないのだから、歯痛は人間にとってよほど頑固な痛みなのであろう。

歯の痛みは十二ある脳神経のなかの五番目の神経である三叉神経の知覚により生じる。三叉神経は文字通り三叉状に分かれた知覚神経で、そのなかの第一枝は眼神経、第二枝は上顎神経、そして第三枝は下顎神経を構成している。

顔面に生じる疼痛の中でも特に痛みの強い三叉神経痛は発作性に生じるのが特徴である。三叉神経痛は非歯原性の疼痛であり、歯が原因で生じる疼痛ではない。

歯の痛みは上顎神経と下顎神経を介して中枢神経に伝わり、そこで末梢性の痛みとして歯痛を感じる。歯の痛みの原因の多くはむし歯か歯周病である。歯が原因で生じる疼痛を歯原生疼痛と言い。

ひとこと、‘1/f ゆらぎ’と言う、自然界や身体に見られる現象が話題になったことがある。ヒトの心拍、電車の揺れ、小川のせせらぎ、鳥の鳴き声、炎の揺れ、などが1/f ゆらぎに相当する。1/f ゆらぎに接することで自律神経は整い、心身が安定すると言う。音楽にも1/f ゆらぎに似た要素があるようにも思われるが、歯の痛みを鎮めるほどの働きはないのであろう。

Long in the teeth.

(歳を取りすぎている)

昔、英国で使われていた言葉。

‘The length of the teeth.’ の意に由来すると言う。

馬の歯は歳を取ると歯茎が退縮して長く見えることから、歯の長さは加齢の譬えになった。米国やヨーロッパに「もらった馬の歯を見るな」と言うことわざがある。これは物の値踏みをしてはいけないと言うことの譬え。

歯は歳を取ると磨り減り短くなると考えるのが普通である。歯よりも先に歯茎が衰えると言うのは意外な見解である。縄文時代のように、どんぐり、栗、栃などの堅果類を食していれば歯は磨り減るかも知れないが、現代のようによく調理された食物で歯が摩耗することはない。いずれにしても、馬の歯は歯茎の退縮により相対的に長く見えると言う発想は見事である。

‘The actor is a bit long in the tooth to be playing Tom Sawyer.’ (その俳優はトムソーヤーを演じるには少々歳を取りすぎている) や ‘She is a bit long in the tooth to play the part of a young girl.’ (彼女は若い娘を演じるには少し歳を取っている) などは、若さを売り物にした俳優の厳しい現実を物語っている。

If you cannot bite, never show your teeth.

(噛みつく勇気がなければ、歯をむき出してはいけない)

‘Show the teeth.’ は力の象徴である歯をむき出すことの意。歯は体の中で最も固くて強靱な組織であることから、比喩的に威力や破壊力の譬えとして用いられる。

冒頭の句は勝ち目がなければ戦うなど言っているのであろう。

‘Show one’s teeth.’ と言えば個人の力を示す比喩。‘Show the flag.’ となると、個人の域を超えた国力の誇示になる。

2001年9月11日にアメリカ同時多発テロ事件が起きた。その時、米国のアーミテージ国防長官が当時の柳井俊二駐米大使に対して、‘Show the flag.’ と言ったとか、言わなかったとか伝えられている。

動物は他の生き物を威嚇するとき歯をむき出す。ヒトは怒りを覚えても歯をあらわにすることはない。ヒトと動物の違いは感情を言葉で言い表すことが出来るかどうかの差であろう。

Bone in her teeth.

(歯で骨を銜える)

船やボートなどの船舶に関する用語である。古い時代に船員が使った口語体の常套句とされている。

帆船時代の話であり、高速で走る船の舳先に生じた大きな白波が、あたかも犬が白い歯で白い骨を銜えて走っているように見えた。‘teeth’ は ‘mouth’ の同義語。

船に白波はつきものである。海の波は気象の影響を受けるので、天候次第でいろいろな波風が立つ。‘ A great white bow wave ’ (大きな弓なりの白波) は英語による波の表現の一つ。「冬の海の遠くで起きた小さな白波は歯のような形で現れる」は三好達治の『砂上』に見られる一節。

世界には種々の言語があり、言葉による表現も千差万別である。ことわざは言葉の延長線上にあるものとする、言語の違いがことわざの成り立ちにも影響を与えているかも知れない。

Tinsel-teeth.

(金ぴかの歯)

米国の俗語。

歯の矯正治療のため金属の装置を付けている子の愛称。口元を冷やかしていると言ってもよいであろう。

歯は金色に光っているのではないので、銀ピカと言うべきかもしれない。

歯の矯正治療はいろいろな装置を用いて行う。中でも針金を使って歯を縛る類のものは、金属のバンドにブラケットが付いているので、見かけが仰々しい。笑った時、口全体が銀色に光るのも、口元が目立つ原因になる。

歯の矯正治療用装置を付けていると面白おかしく言われる。口の中の装置が邪魔になり、不自由な思いをするのは本人である。会話や食事中に装置が口の粘膜に当たり、楽しいはずのひと時が愉快でなくなる。歯も針金で締め付けられているので痛い。食べ物の味などあったものではない。

美しい歯並びは口を開けるのを拒まない。歯に秘密はないので口の中をのぞかれても平気である。歯並びが悪いとしゃべる時に口元が気になり、つい手で口元を覆う。言葉の出る幕がない。つまらない気遣いで会話の楽しみは台無しになる。

歯並びがきれいになり、心まで明るくなったという話がある。決して大げさな話ではない。今は歯並びだけでなく、歯の色にも悩みを持つ人が少なくない。

子供の歯が治療装置のためピカピカ光るのはご愛敬。大人の歯が金属で光ると安っぽく見られる。特に金融関係の仕事をしている人が歯の治療に金を使うのを嫌うという話が海外にある。顧客が成金趣味を好まないのであろう。

Dressed to the teeth.

(見事に着飾る)

米国の俗語。

‘She is dressed to the teeth in magenta silks.’ と言えば、赤紫色の絹の衣装を見事に着飾った姿。文句なしの着こなしである。‘Dressed to the nine.’ とも言う。‘nine’ (9) は完璧な状態を表す。

西洋では「9」をひとそろいの数と見なす慣習がある。野球チームの9人が然り。ゴルフコースの18ホールが、前後半共に9ホールであるのも納得がいく。ギリシャ神話にあるミューズ九女神も「9」に縁がある。

九女神はゼウスを父に、ムネーモシュネーを母に持つ芸術と学問の神。数霊術で「9」が神秘的な数であることが納得できる。

わが国には、「三々九度」と言う儀式の献杯作法がある。三つ組の盃を用いて、一つの盃で三度ずつ御神酒をすすめる。「九」は「三」の倍数。「三」も不思議な数と言ってよいかもしれない。プロ野球のスター選手の背番号が「3」であるのも偶然なことではなかろう。

歯は上下合わせて32本ある。霊数とは縁のない数であるが、美しく生え揃った歯並びは見事である。ミューズ九女神も惜しみなく拍手を送るであろう。

Drop one's teeth.

(びっくりする)

米国の俗語。

歯が抜け落ちるとびっくりする。歯が少なくなると悲しくもなる。

‘I almost dropped my teeth when she told me her news.’ はその用例。

彼女の近況を聞き驚いている。

歯の喪失は心にまで影を落とす。心理的な寂しさにもつながる。大げさに言えば自尊心まで傷つく。歯は物を噛むだけでなく、心の支えにもなっている。

人を骨抜きにすることを‘Take the teeth.’ と言う。人を殺すには刃物は不要。歯の二、三本も抜けばそれで十分である。

‘His teeth are drawn.’ (彼の歯は引き抜かれた) は英語の故事。強い者が力を失う

ことの譬えである。出典は『寓話』の「恋するライオン」。

ライオンが美しい娘に恋をした。娘との結婚を条件に牙を抜き、爪を切り落とす約束をする。牙も爪もないライオンは猫以下の存在。凶暴性を失ったライオンは娘の父親の手に掛かり殺される。

「歯がない者は板が必要」はリトアニアにあることわざ。

歯のない老人は死が迫っているので、棺桶が必要だと言うこと。

「歯のある者にパンなく、パンある者に歯なく」はイタリアのことわざ。「粉があるのに袋なく、袋あっても粉なし」も同じ譬え。両者共にこの世は皮肉なものだと嘆いている。

嘆くことはない。世の中には 32 本すべての歯を失っても、100 年以上も長く生き伸びている人もある。

Get one's teeth into something.

(意を決して事に臨む)

米国の俗語。

‘Sink one's teeth into something.’ とも言う。

歯は欧米では実行力や施行手腕の譬えとして使われる。法律や条例の発効も ‘Put teeth into.’ と言う。

言葉の世界では歯は強い意志の譬えとして使われる。

わが国には「手も歯もつかぬ」という方言がある。先に引いた米国の俗語の反対の意に近く、手の付けようのないさまを言う。

何か事を始めるには手か歯を付けるしかない。着手がそれであり、物を食べるには歯を立てなければならない。歯が立てば噛むことが出来る。食して口に合えば、歯に合うと言う。

「歯が立たない」は「歯が立つ」の打ち消しだが、肯定の用法より否定形の方がなじみ深い。

意を決して事に臨む場合は、歯は食いしばるより、むき出すくらいの方が迫力がある。

Clean as a hound's tooth.

(やましい事はない)

米国の俗語。

直訳すれば、猟犬の歯のように汚れがない、となる。

ポインターなどの猟犬は狩猟用に教育されており、決して獲物に手、いや歯を付けることはない。猟犬は獲物の場所を主人に知らせ、獲物と格闘の末、それを取り押さえるのが使命

である。

一方では、猟犬は獲物を猫糞してもおかしくない立場にある。主人の目が届かなければ、いつでも獲物を失敬できるが、忠犬は決してそのような後ろめいたことはしない。口はきかなくても白い歯が身の潔癖を証明する。

‘ His record is clean as a hound’s tooth now. ‘（彼の経歴にやましい物はない）は用例。

欧米では歯の色を「キャンパスのように白い」と言う。これは比喩的表現であり、歯は実際には真っ白ではない。歯の色を正確に言えば黄白色である。無色半透明のエナメル質を介して象牙質の色が透けて見える。象牙質の形成に障害が生じると、歯は白色も淡黄色も呈さない。くすんだ輝きのない歯になる。

猟犬はつらい。自分の潔白を訴えるには常に白い歯を保たなければならない。うかつに歯の病気には罹られない。

Armed to the tooth.

（隙間なく武装する）

米国の俗語。

動物の歯は物を食べるだけのためにあるのではない。外敵への攻撃や防御のための武器としての役割も担っている。歯は例外はあるが隙間なく並んでいるのが普通である。

ヒトは主に歯を咀嚼や構音に使う。ヒトをあやめるために歯を使うことは滅多にない。歯を比喩として武器や武力になぞらえる事はある。

‘ There are too many guns around .’ ‘The entire country is armed to the teeth.’ はその用例。攻撃に対して国全体が完璧な防御体制にある。つけ入る隙間がない。

歯は攻撃的な言動を表す比喩としても用いられる事があることから、’ To show ones’ teeth.’ という俗語もある。人間であれば脅迫的な態度、動物では歯を剥き出した威嚇の様相と言ってよいであろう。

感情をあらわにして怒るさまを日本語では「歯を出す」と言う。

人間であつても歯を剥き出しにして、唇を震わせる様相は理性のある動物には程遠い。動物の本能さながらの姿に近い。

「歯を抜く」という古い言葉がある。感情丸出しにした攻撃的な言い方である。「歯を出す」が静的な攻撃であれば、「歯を抜く」は相手に対する動的な威嚇と言ってよいであろう。歯はやはり武器に近い存在である。

To lie in one’s teeth.

(はなはだしい嘘をつく)

米国の俗語。

‘You lie in your teeth.’はその用例。「お前の言う事は真っ赤な嘘だ」と言っている。

‘Lie through one’s teeth.’も同じ意。‘I am not lying through my teeth! I never do!’(私は決して嘘をつくような人間ではない)は用例。

嘘は脳の指令に従い口が発するが、歯のかかわりがあるのが面白い。歯は悪さをするように見えるのであろう。

物を言うには口を開き舌を動かさなければならない。口を閉じて歯を食いしばっていたのでは話にならない。口は開き歯を露出して虚言を吐くと、あたかも歯が勝手に嘘をついているように見えるのかも知れない。

「世に語り伝ふること、まことはあいなきや、多くは皆虚言なり」は『徒然草』の第七十三段にあるくだり。

世間で語り伝えられることは事実のままではつまらない。多くは皆嘘で固められていると指摘する。

嘘をつくのは決して褒められた事ではない。時と場合によっては「嘘も方便」という言葉があるように、嘘をつかなければならないこともあるようだ。馬鹿正直の吐く言葉は軽い嘘より罪が重い。

As scarce as hen’s teeth.

(あり得ないこと)

米国の俗語。

‘Scarcer than hen’s teeth.’も同じ意。

鶏には歯がないことが背景にある。大変稀な事や、あり得ない事を表す時の常套句。

‘I have never seen one of those. They are as scarce as hen’s teeth.’は用例。

非常に稀な物なので今迄に見た事がない。あり得ない事だと言っている。

‘hen’の語義に、『新コンサイス英和辞典(第二版)』(三省堂)では「めんどり」の他に、「ある種の魚の雌」とあるのが興味深い。

雌鶏には歯はないが、魚には歯がある。魚の歯はサメのように鋭いものから、カタクチイワシのような刷毛を思わせる物まで種々ある。カタクチイワシの歯は特異な形状をしていることから、言葉としても面白おかしく使われる。

「^{ごまめ}田作の歯ぎしり、^{あひる}家鴨木登り」(『歌舞伎』紋尽五人男一序幕)は、力のない者がいたずらにいきり立つことの譬え。

^{ごまめ}鱈がいくら歯ぎしりしても噛むに値しないし、^{あひる}あひるが木に登っても高が知れていると

いうこと。

カタクチイワシは鱧の材料。カタクチイワシの刷毛のような歯では歯ざしりは出来ない。水かきのあるあひるの足では木に登るのは難しい。

「鳥窮^{きゆう}すれば則^{すなわ}ち啄^つむ」(『荀子』哀公)という言葉がある。

鳥でも窮地に追い詰められると必死になって嘴でつつくから、注意が必要だと言うこと。

「牙あるものに角^{つの}無し」と言うが、鳥のように歯も角もなくても、嘴と言う武器があるから侮れない。

何事もあり得ないことはないのである。

Sink one's teeth into something.

(何かにかぶりつく)

米国の俗語。

誰しも大好物にはかぶりつきたくなる。

‘ Look at that chocolate cake ! Don't you want to sink your teeth into that ? ’ は用例。

甘い物に目がないのは誰しも同じ。かぶりつきたくなるのは当然のことである。それを聞くのは野暮の骨頂。

「ただ食へ、ただ食へ、アムアムアム」「頤^{おとがい}落つるやうな、アムアムアム」(『小名狂言』附子)。

食べ物が大変おいしい。おいしくて顎^{あご}が落ちそうだと言っている。「頤」は顎の意。

美味しい物にかぶりつきたくなる心理に国境はない。

歯は食の譬えに用いられ、食の好みや味覚を表すことが多い。

‘ What a tooth for fruit had a monkey ! ’ は用例。

サルの好物は果物。果物はサルの歯に合う。

「タマリンドの実もそれをすすらない者の歯は浮かせない」はセネガルのことわざ。

タマリンドの果汁は酸っぱい。そのことを知っている者はすすらない。何事も前もって準備していれば、憂き目にあう事はないと言う譬え。

タマリンドの実はマメ科の植物。南アジアやアフリカなどの熱帯地方が原産地。豆果は多肉で甘酸味があり、食用や酢の原料に用いられる。

歯は酸っぱい食べ物だけでなく、甘い言葉にも浮く。甘い言葉を掛けられると、歯も心も舞い上がってしまう。

おいしい話にかぶりつく痛い目に合う。かぶりつくのは食べ物だけで十分である。

In the teeth of the wind.

(風に向かって真っ向から逆らう)

米国の俗語。

‘ **In the teeth of storm.** ’ も同じ意。

風はいろいろな形で表現される。逆風があれば、追い風もある。さらには無風もある。数ある風の状態の中でも、逆風は話のタネになりやすい。力学的にも逆風のほうが追い風よりも力の源になる。

子供の頃、農閑期の田んぼでゴム動力の模型飛行機を青空に向けて何度もなんども放った。飛行機は風に対抗しなければ飛び上がらないことを子供心に知っていた。風の強さと方向を肌で感じ取り、機首の角度と方向を定めて愛機を放つ。

飛行機が微風を突き大空高く舞い上がり、上昇気流に乗ればしめたもの。ゴム動力が切れた後でも、プロペラは空転装置の働きでいつまでも回転する。愛機が大きな円を描き、大空を悠々と舞う姿を見て小さな胸は高鳴った。

風の抵抗が役に立つのは飛行機に限ったことではない。人間も逆風が飛躍の原動力になることがある。追い風は後押しをしてくれるが、押し上げてはくれない。逆風に対抗する自分を自力とすれば、追い風はさしずめ他力。他力は他人の力。他人の力はいつ無風になるかわからない。

自然が気まぐれであるように、後押しする人の心も恒心を貫くとは限らない。

人間は逆風に立ち向かうことにより力をつける。人の力に頼りすぎるとせつかくの自力が衰える。風がなければ自分で起こせばいい。無風であっても歯を食いしばって走れば、風は向こうからやって来る。

Fly in the teeth of somethings(someone).

(何（誰）かに向かって真っ向から反対する)

米国の俗語。

‘ **Fly in the face of something(someone).** ’ も同じ意。

‘ **John loves to fly in the teeth of tradition.** ’ (ジョンは伝統に逆らうのが好きだ) は用例。

先の句と文で、「歯」と「顔」が同格扱いされているのが興味深い。両者は共に体の正面を向いているので同一視されるのであろう。’face to face‘ (面と向かって) という慣用句はあるが、‘ **teeth to teeth** ’ という言葉がないのは不思議である。

日本語で「歯と歯」と言えば固い約束を意味する。

歯は比喻として物事に逆らう意があることから、非難の矢面に立つことがあるのは当然

のことかもしれない。

先の句の ‘fly’ には「避ける」と言う意味があることから、何事にも同調せずに非難を潜り抜ける、と解することが出来るであろう。結果的にはすべてを無視して反抗することになる。

「歯牙に懸ける^か」という言葉がある。これは「取り立てて言う」の意であるが、普通は否定形を伴い、「歯牙にも懸けない^か」と言う場合が多い。取り立てて言うほどの価値はないことの意であり、先の英語の句の意味に限りなく近い。

「飯のあらと嫁のあらは少しでも歯にかかる」と言うことわざがある。飯に混じった粃殻はたとえわずかであっても歯に引っ掛かるように、嫁のとるに足らない欠点でも気に障るということ。

歯は物を噛み砕くだけでなく、事の重大さも噛み分けることの出来る優れものである。歯などと侮ることなかれ。

Grit one's teeth.

(歯を食いしばる)

米国の俗語。

‘grit’ に近い言葉として、‘gnash’ がある。感覚的には同義語のように思われるが、両者には明らかな意味の違いがあるようだ。

‘The New Oxford Dictionary of English, 1998.’ によれば、‘grit’ は ‘clench (the teeth) , especially in order to painful duty’ とある。‘gnash’ は ‘grind (one's teeth) together, typically as a sign of anger’ とあり、やはり両者は使い分けなければならない。

‘He didn't want to have the operation, but I told him to grit his teeth and go through with it.’ は用例。

歯を食いしばって手術を受けるよう励ます。

『大辞林』(三省堂)では、「食い縛る」は「歯を強くかみ合わせる。また、そのようにしてこらえる。くいしめる」とある。歯を強く噛み合わせて生じる「歯ぎしり」とは微妙に意味合いが違う。睡眠時の歯ぎしりとは全く異なる。

「歯をくいしばりめを見つめ七ツ^{てん}転八^{ぱつ}倒くるひしは不便にも又^ふ哀^{びん}也^{あわれ}」(『浄瑠璃』三勝半七二十五年忌)。

歯を食いしばり、目を大きく見開き、狂ったように激しく悶え苦しむ姿はかわいそうであり、哀れでもある。

歯ぎしりは悔しさを表す歯の表情。歯を食いしばるほどの思いに比べれば、歯ぎしりによる感情表現は高が知れている。

歯ぎしりによる感情表現を表面的とすると、歯を食いしばる所作は内面的であり、奥ゆか

しい。

歯ぎしりは音を発するので人目を引く。歯を食いしばる姿は無言であり、誰も気が付かない。それでも十分に人の心を打つ。

Through one's teeth.

(涙みのある声で)

米国の俗語。

歯を食い縛り、歯の隙間から出る涙みのある言葉。激情を押し殺した言葉である。’
between one's teeth’ も同じ意。

「宅で壹人で思ひ出して泣いて居る時があるト聞て、しばらく仇吉はものさへいはずしやくり上、さしこむ癪に歯を食しぱり、こらへかねたる女の情」(『春色辰巳園』初二) は、女の情の深さに感激した男の心情を表す下り。女心の不憫さを想うと自責の念が込み上げ、それに堪えている。

激怒することを「歯を噛む」と言う。歯を噛む場合、ふがない自分に怒りを向けるときと、他人に対して怒りを露にすることがある。怒り心頭に発して歯を噛み、歯をギリギリ軋ませて怒鳴り声は発しない。

怒りが心頭に発すると歯噛みだけでなく、言葉にならないことばが歯の隙間から漏れ出ても不思議ではない。言葉の漏出で高まった感情は減圧され、平常心を取り戻すことが出来るかも知れない。

古の人は実にうまく自制心を働かせたものである。滅多やたらに堪忍袋の緒は切らない。今を生きる人間は歯を噛み言葉を押し殺す前にすぐに手を出す。自制心を働かせる力は昔の人間の方が著しく勝っていたように思われる。

「『此の頃跡絶へし添寝の床ゆかしなつかし恋しや』と、互にひしと抱き締め歯を食縛り息を詰め」(『卯月紅葉』近松門左衛門) は少々色っぽい話。歯を噛みしめる所作はいろいろな場面で見られえる。

怒り心頭に発する感情であっても、歯を食いしばり堪忍すれば、感情は時と共に緩和される。感情が歯の隙間からこぼれ出て溜息に変わるとさらによいのであろうが。

Cut one's teeth.

(物心がつく)

米国の俗語。

‘Cut one’ milk teeth.’ (乳歯が生える) と言えば、乳児から幼児への成長を想像させ

る。’Cut one’s second teeth.’ と言えば成長はさらに進み、分別のある大人になることを意味する。’second teeth‘ は永久歯の意であり、乳歯の ’first teeth‘ に対応した表現。

’He has cut his eye - teeth.’ (彼は分別のある年頃になった) は例文。’eye-teeth‘ は犬歯の意。犬歯は「犬」と言う字ずらから逞しさを感じさせる。実際、犬歯はどの歯よりも根が長くいつまでも残存しやすい。先の例文では大事な犬歯が生えたことで、世間一般の常識を身につけた大人になったと言っている。

’eye - teeth‘ は上顎犬歯を言う。上顎犬歯は目の下に位置していると言うのは見事である。大事な上顎犬歯を、’give one’ eye-teeth for ~‘ (~のためならどんな代償でも払う) という成句もある。ちなみに、下顎の犬歯を ’stomach tooth‘ と言うが、そのいわれについては不明。直訳すると「胃の歯」となる。下顎左右の犬歯はあたかも胃を吊り下げているかのような場所にあることから、’stomach tooth‘ の称があるのかもしれない。

エピソード

日本語の歯のことわざと英語の歯のことわざに何か本質的な違いがあるとすれば、それは日本では歯を唯心的に、西洋では唯物的に表現している場合が多いと言ってよいかもしれない。唯心的とは宗教的、唯物的とは肉体的なことを意味する。日本には「歯の抜けた夢は不吉」ということわざがある。歯が抜けると死を連想させることから、歯の抜ける夢を忌み嫌った。西洋では歯が抜けることは権力や職権の喪失と解した。英語で ”Show the teeth.” と言えば強い意思表示であり、“ Show the flag. ” と表現すれば、個人の力の域を超えた国威を示すことになる。

歯に関する概念はわが国と諸外国においては少なからずの相違があるように思われる。欧米では八重歯はドラキュラやオオカミ男を連想させることから忌み嫌われたが、わが国ではかわいい女の子の象徴である時代があった。今はそのような美意識はない。一般論としての美意識は国の風俗や歴史、あるいは環境の相違により異なるであろうことは十分に想像できる。

歯は小説や文学を中心にした文芸作品だけでなく、聖書においても感情表現の身体言語として散見されるのは特筆に値する。特に聖書の中で ’weeping and gnashing‘ (嘆き歯噛みする) という成句が散見されるのは注目に値する。

歯にまつわる言葉といえばシェイクスピアの言った「歯の痛みは哲学者でも我慢できない」や、江戸中期の戯作者、曲亭馬琴が吐いた「歯は葉なり、歯牙の脱落葉の如し」を挙げなければなるまい。両者は論理と感性に富んだ東西における名言と言ってよいであろう。